論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（　心理学　）	氏名	濱　田　　祥　子
学位授与の要件	学位規則第４条第[1]・２項該当		

論　文　題　目

幼児の外在化問題に対する保育者の認知と保育実践に関する研究

論文審査担当者

主　　査	教　授	杉村　伸一郎
審査委員	教　授	湯澤　正通
審査委員	教　授	服巻　豊
審査委員	准教授	清水　寿代

〔論文審査の要旨〕

本論文は，外在化問題に対する保育者の認知と保育実践の関連を検討するとともに，認知傾向に対するフィードバックと背景要因に対する介入の効果を検証したものである。外在化問題とは，反抗性，攻撃性や多動性などの環境との葛藤に関する行動の諸問題を指し，保育現場では「気になる子ども」と称される概念に包含される。論文の構成は，次のとおりである。

第１章では，本研究の背景と目的を述べている。第１節では，外在化問題を示す子どもの保育に関するレビューを行い，不適切となりかねない対応がされやすく，子どもと保育者の相互作用における悪循環の恐れを指摘している。第２節では，外在化問題に対する保育者の認知と保育実践を整理し，外在化問題への対応に関連する認知的要因として，行動と対応の評価ならびに背景要因の推定を示すとともに，対応や認知に保育方法が関連する可能性について論じている。第３節では，外在化問題における保育者支援に関する研究を概観し，保育者支援の方法開発と効果検証の必要性を指摘している。以上の検討を踏まえ第４節では，外在化問題における保育方法，評価，背景要因の推定と対応との関連ならびに認知傾向等のフィードバックの有効性を検討し，保育者の支援方法を提案することを本研究の目的としている。

第２章では，外在化問題に対する保育者の認知と保育実践の関連を検討している。第１節（研究１）では，背景要因の推定と対応の関連ならびに，保育経験年数，障害児保育経験の有無，幼児の性別による差を検討するために，保育者 202 名に外在化問題を示す５歳児の事例を提示し，背景要因と対応の項目について５件法で回答を求めた。その結果，経験年数や障害児保育経験にかかわらず，背景要因の「生活環境・状況」と対応の「保育環境の変化」に強い関連が示された。背景要因と対応の群差に関しては，障害児保育経験あり群の方がなし群よりも背景要因の「生活環境・状況」の得点が有意に高かったが，経験年数や幼児の性別による有意差は認められなかった。第２節（研究 2-1）では，研究１で使用した項目を改善するために，保育者が考える背景要因と対応を抽出し，外在化問題に対する評価や保育方法との関連を予備的に検討している。外在化問題に関する行動の報告は女児よりも男児が多いことから，男児の事例のみ（以下同様）を保育者 117 名に提示し，背景要因，対応については自由記述で，行動の評価，対応の評価，保育方法の項目については６件法で回答を求めた。その結果，評価や保育方法の尺度項目の一部で修正が必要なことが示唆された。第３節（研究 2-2）では，背景要

因と対応を測定する尺度項目を作成するために，保育者 310 名に事例を提示し，研究 2-1 の自由記述を参考に作成した項目に 6 件法で回答を求めた。探索的因子分析の結果から，背景要因の推定は 6 因子 32 項目，対応は 10 因子 54 項目を本調査用の項目とした。

第 2 章第 4 節（研究 2-3）では，研究 2-2 で作成した項目を用いて，保育者 628 名に事例を提示し，評価や背景要因の推定と対応との関連ならびに，保育方法，保育経験年数と評価，背景要因の推定，対応との関連を検討している。探索的因子分析の結果から評価や保育方法の尺度を構成し共分散構造分析を行ったところ，保育方法の「子ども中心・個別保育志向」と背景要因の推定の「保育環境」が受容的対応や理解的対応，適切な意図的対応と関連すること等が明らかになった。第 5 節（研究 2-4）では，研究 2-3 のデータを用いて，保育方法のタイプによる外在化問題への評価，背景要因の推定，対応の違いを検討している。保育方法の下位尺度得点でクラスター分析を行ったところ 5 群に分かれ，一要因分散分析の結果から，個別性が低く一斉性が高い「保育者主導保育群」は，負担感が高く不適切となりかねない対応である「厳しい指導」が最も高いことが示された。

第 3 章では，外在化問題における保育者支援を検討している。第 1 節（研究 3）では，研究 2-1 の参加者を対象に，外在化問題に対する保育者の認知傾向をフィードバックし，その有効性に対する保育者の認知を検討した。フィードバックの内容は研究 2-1 の結果であり，有効性認知 5 項目と省察尺度，フィードバックの感想に関して回答を求めた。その結果，日頃から省察をする保育者ほどフィードバックの有効性を認知することが示唆された。第 2 節（研究 4）では，保育者研修に参加した保育者 161 名（介入群）と不参加の保育者 157 名（統制群）を対象に，背景要因の推定に介入し対応等の変化を検討している。介入群には，事例への対応の自由記述を求めた後，生物心理社会（BPS）モデルやシステム思考に関する講義と外在化問題の背景要因の図式化を実施し，再び対応の記述と図式化の感想を求めた。その結果，図式化の前後で対応のカテゴリー数が増加すること，介入群は統制群に比べて評価（重大性，負担感，責任性）の得点が低下すること，が示された。

第 4 章では，本論文の成果として，保育方法と背景要因の推定が対応に関連していることを示した点と，フィードバックや背景要因の推定への介入が効果的な保育者支援となりえる点を挙げ，意義が論じられている。そして，今後の課題として，子どもの行動や保育者の対応を直接評定する必要性や，介入の内容と効果検証の指標を改善する必要性などを挙げている。

本論文は，次の 3 点で高く評価できる。

１．幼児の外在化問題に対する保育者の対応を幅広く想定するとともに，対応に関連する要因を，行動の評価，対応の評価，背景要因の推定といった認知的側面だけでなく保育方法や保育経験年数等も含め，総合的に検討した。

２．不適切となりかねない対応を防ぐ上で，背景要因として保育に関する要因を推定するとともに，保育者主導で一斉志向の保育を弱めることが重要であることを示唆した。

３．背景要因の推定への介入は，外在化問題への否定的な評価や子どもの行動を変容させようとする対応を低減することを示した。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（心理学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和６年２月１３日